大学院進学という選択肢（文学部学生向け）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021.7.21

「大学院、ちょっと興味はあるけど、行ってどんなメリットがあるの？」と思っている、文学部学生の皆さんは多いかと思います。そこで私の考えを簡単にまとめてみました。進路を選択するさいの、参考にしてください。

１　こんな人が向いている

　その学問分野に関心がある人、教職の専修免許と取得したいという目的がある人などは当然として、それ以外でも、以下のような趣味・嗜好がある人は、大学院で勉強することで、より将来の進路が広がる可能性があります。

（１）創作をふくめ、文章を書くことが好きな人

（２）調べたり、まとめたりすることが好きな人

（３）どちらかといえばマイナーなもの惹かれる人

（４）旅行することが好きな人

（５）何かを集めることが好きな人

２　大学院進学のメリット

大学院進学は、よりよい人生を設計するための、ひとつの選択肢です。修学には当然、時間とお金がかかりますが、それは未来の自分への「投資」と考えることができます。では、そこにはどのような「報酬」があるのでしょうか。

（１）仕事ができる人間になる

問題を見つけ、調査・考察・解決する能力が養われます。そういう思考訓練を受けた人は、それを受けていない人に比べると、基本的に質の良い仕事ができます。たとえば、公務員でも、企画力・プレゼン力・文章力などにおいて差がつくでしょう。

（２）研究が仕事に直結する

修士2年間で得られる知識は、学部2~4年生で得られるそれと比べ物になりません。たとえば、国語教諭の場合、自分の中に多くの「引き出し」を持った状態で、教材を取り扱うことができます。これは、生徒側にとっても魅力的でしょう。とくに進学校の生徒は、先生の出身大学や学位に敏感なものです。

（３）人生が豊かになる

文学・哲学・歴史などにかんする専門的な教養が身についているので、読書・映画・演劇・展覧会・旅行などが一層楽しくなります。たとえば、英語以外の外国語が読めたり、話せたりするには、学部の勉強だけではとうてい無理でしょう。私の専門とする古文のくずし字などもそうです。旅先で、石碑の字が読めたりするのは楽しいものです。

３　大学院進学を阻む問題

　学問の奥深さを知って、「もう少し勉強してみたいなあ」と思ったとしても、さまざまな要因によって、その思いが潰えそうになることがあるでしょう。その代表的な要因と、それへ対処法を示してみましょう。

（１）自分の能力

　　「卒論もちゃんと書けるか分からないのに、自分は本当にやれるのであろうか」という不安です。しかし、最初から自分の能力に自信がある人など、めったにいません。そして、一瞬でも「大学院に行ってみようか」と考えるほどの人は、ほとんどの場合、その時点ですでに素質がある人です。心配することはありません。

（２）家族の理解

　　家庭の理解を得られないという場合、その一番の理由は学費の問題ではないでしょうか。「大学に行かせるのでさえ大変だったのに、院なんてありえない」と。ならば、学費は親に頼らず自分で払いましょう。「それでも大学院に行きたいのだ」という「覚悟」を示せば、この問題はだいたいクリアできるものです。

（３）学費の負担

　　とはいえ、どうやって学費を自分で払うのか。最もオーソドックスな方法は、日本学生支援機構などの奨学金を借りることです。でもそうすると、修士課程の2年間だけでも、百何十万かの「借金」を負うことになります。しかし前述のとおり、これは自分への「投資」と考えましょう。

たとえば、自分のお店を開く、会社を起業するなどというときは、数百万円の借金を負うのは当たり前で、それなりのリスクを負うものです。しかも大学院進学という「投資」には、その結果がマイナスになるというような危険性は、ほぼありません。

とくに将来、教員になりたい人などは、２-（２）で述べたように、むしろ修士号をもっていない方が、将来的に損をするほどだと思います。

　　また授業料免除制度、奨学金返還免除制度、日本学術振興会特別研究員採用などで、その「投資」を最小限に抑えることも可能です（URLは、2021年7月21日現在）。

　◇授業料免除制度

　　要件：経済的な理由で納付が困難な者。各大学が実施。九州大学は以下のとおり。

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/education/fees/exempt02>

◇奨学金返還免除制度

　　要件：第一種奨学金の貸与を受け、在学中に特に優れた業績をあげた者。学生支援機構が実施。

<https://www.jasso.go.jp/shogakukin/taiyochu/gyosekimenjyo/index.html>

　◇日本学術振興会特別研究員（博士課程以後）

　　要件：優れた研究計画を持っている者。月額20～36万円を給付。

<https://www.jsps.go.jp/j-pd/>

４　私自身の経験

　実例として、私自身の経歴を紹介しておきましょう。

　私の家庭は、それほど経済的に余裕がありませんでした。高校は有無を言わさず公立で、しかも日本育英会（現在の学生支援機構）の奨学金を受給していました。大学も自宅から通える公立を選び、これも当然のこととして、日本育英会の第一種奨学金のお世話になりました。また、半期ごとに募集される授業料免除の申請も欠かさず、だいたい全免か半免になっていました。

　大学に入ってから、漠然と高校の教員になりたいと考えていましたが、学部3年生のときに演習で学問の面白さに目覚め、とりあえず大学院修士課程までは行ってみよう、という気持ちになりました。そうして修士課程に進学しましたが、ここでも奨学金と授業料免除の両制度を利用しました。アルバイトは、私立高校の非常勤講師を週3日（授業10コマくらい）勤め、月10万円くらいになりました。

　修士課程に進むと、大学のなかだけではなく、他の大学の先生方や大学院生が月1，2回の頻度で集まる研究会にも出るようになり、そこでさらに学問の奥深さを知るようになりました。修士論文を仕上げるまでに3年かかりましたので（のんびりした性格なのです）、3年目には奨学金もなく苦しかったですが、アルバイトを上記にプラスして月3万円分ほどこなし（塾講師）、授業料に宛てました。

博士後期課程に進学後も、当初は日本育英会の奨学金を受給していましたが、3年目で日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用され、当面、経済的な心配はしなくてもよくなりました。その後、順調に博士論文を提出し、引き続き日本学術振興会特別研究員（PD）に採用されました。そして大学教員の公募にチャレンジしつつも何度か夢破れましたが、どうにか採用期間内に大学教員になることができました。ときに31歳です。

　31歳と聞くとぎょっとするかもしれませんが、その間、将来の計画もなくただ漫然と生きていたわけではありません。一人前になるための「仕込み」をしていたのであって、つねにゴール（就職）に近づいているという実感はありましたから、焦りはありませんでした。むしろ、充実といったほうがよいくらいです。そして経済的にも、貯蓄はさすがにほとんどできなかったですが、明日の食べ物に困るなどということはありませんでした。

５　大学教員（研究者）という人生

　以下は、将来とくに大学教員（研究者）になりたい人向けに、研究という仕事にどんな利点や楽しみがあるかを述べたものです。

（１）裁量労働制で労働時間がフレキシブル

何時に出勤して、何時に退社するという形態ではなく、自分の裁量で業務の場所や時間帯を決めることができる。自分のペースで仕事ができる。

（２）上下関係がゆるい

大学という組織は、基本的には教授から講師までみんな「平社員」。上司の顔色をうかがったりして神経をすり減らす必要がない。

（３）社会的信用があり、給与が安定している。

　　起業家のように、けっして大儲けをできるわけではないが、労働に費やす心身の疲労に比してリーズナブルな給与が得られる。つまり割がいい。

（４）自分の名前を冠した本が残せる

　　博士号をとって数年も経てば、論文もたまってきて、一冊の本にしようかという話になります。自分の名前が背表紙に入った本が、書店や図書館に並びます。

　　以上簡単ではありますが、大学院進学という選択を、人生の選択肢のひとつに加えてもらいたくて、思いつくままに書き綴ってきました。最後に一つだけ、とても重要なことを書いておきたいと思います。

　◇勉強するなら今（20代）が旬！

30歳になって、あるいは50歳になって、仕事や家庭が落ち着いてから大学院に入り直そうなどと思っていると、ついにその機会を逃します。

大学側には、社会人を受け入れるリカレント教育の体制は整っていますが、その歳になってじっさいに2年間の勉強をするとなると、相当の覚悟が必要になってきます。仕事や家庭という「しがらみ」がなく、頭が柔らかい今こそが、もっとも効率的に勉強できる時間だと思ってください。